



# 受け継ぐ 三番叟への想い

吉田 外喜夫

聞き手・川嶋唯里 見砂佑香 (学校法人七尾鵬学園 鵬学園高等学校1年)



中能登町の能登比咩神社

## さんばそう 三番叟守るため

私の名前は吉田外喜夫です。以前は役場に勤めていたが、現在は退職し、家の周りを整理しながら、地元である中能登町能登部下(能登比咩)神社に伝わる奉納神事舞三番叟を教えています。三番叟は子どもが踊る舞なんです。下出地区の長男という決まりがあつて、年に1人選ばれます。私も長男でしたが踊ったことがないんです。しかし、18歳の頃青年団で、三番叟に関わることができ、今では、三番叟保存会の一員を務めさせてもらっています。その三番叟保存会での取り組みは、祭りの約1ヶ月前から三番叟の舞の順番、動作の演技指導をさせてもらっています。子どもたちが1日ずつ成長し覚えていくことがやりがいです。

また、三番叟を教えること以外に、普段は畑・山林の手入れをしています。時間があるときは趣味の旅行や登山、映画鑑賞などをして楽しんでいます。充実した毎日を送っています。

## 明治から続く三番叟

三番叟とは、中能登町の能登比咩神社の春の例祭で、夜半に同神社で催される神事舞です。少年が1人で、終始無言ではやしかた囃子方に合わせて農事に関する所作を演じます。明治からの記録が残っており、1年の豊作を祈り、清めをなすものとされています。「前田利家が三州を領したことを民が悦び祭事を行い、乙女神楽を奉納した」ことを起源としているらしい。約400年前から三番叟があるようです。三番叟は昭和59年(1984年)に旧鹿西町民俗文化財に決まりました。それを中能登町が引き継いでいます。

三番叟は元々秋祭りに行っていました。現在は子ども・親・地域の方の集まりやすいように、4月の第3日曜日の春祭りに行われています。

三番叟は歌舞伎と能が合わされた舞になります。「物事の初め」という意味をもつお祝いの舞です。ごこくほうじょう五穀豊穰の舞とも

言われています。1年の豊作を祈り、清めのために行われていると言われています。主に1年12ヶ月の農作業の動作である、種まき・田植え・鳥獣の追い払い・収穫の喜びなどの演技を行います。主役となる少年は、決められた地区の8～9歳の長男でしたが、子どもが少なくなり、現在は小学4・5・6年生の長男または次男が務めるようになりました。昔から主役になることは喜ばしいことであり、家の誇りでした。現在は、子どもの数が減り、中には2、3回経験している子や兄弟が選ばれた家もあります。親も子も経験している家もあります。練習は3月中旬頃から約20日間、夜7時頃から保存会で演技を教える人が数人集まり練習を行います。

## 米の豊作を祈る

三番叟は1年間(12ヶ月)の農作業の動作を表現しています。野座りをして待機しています。ひょうしぎ拍子木の音に合わせて面箱(面を入れてある箱)を安置した三方を捧持し、参拝者



(左上) 祈りを込めて舞う姿  
(左下) 囃子にあわせて舞う少年  
(右) 衣装

## 子どもの体験談



体験を語る  
梅木 拓実さん

### ▶《昨年の秋祭りで三番叟を演じた少年》

「初めは、大変そうというイメージでした。練習がきついときもありました。でも、本番は、緊張しながらも、成功させることができました。自分がイメージしていたよりも、思い通りに楽しく踊ることができました。僕のお父さんも、三番叟を舞ったこともあり、家に帰ってから少し練習したりしました」  
吉田さんの「今でも舞うことはできますか？」という質問に、少し照れながらも覚えている演技を「こうだったかな？」と尋ねながら舞ってくれました。

### 《三番叟で笛を吹いた少女の感想》

「踊りの速さに合わせて吹かないといけないし、気を遣いすぎてもいけないので、難しかったです」  
この少女に三番叟で使った笛も持ってきてもらい、実際に吹いてもらいました。

### 《父親のコメント》

「自分の子も舞うとは 思わなかったので、親子二代で舞うことができた事は嬉しいことだと思います。本番前には時々練習を見に行きました。この三番叟を絶やしてはいけない、受け継いでいかなければならないとは思っています。また、その時は手伝うことができたらと思います」

に披露した後、面箱を元の場所におきます。昔から三番叟は面をつけずに舞います。捧持する面箱も元々は面を入れてあったと思われるが、今は入っていません。何時まで入っていたのか解りません。

拍子木が止まり「オオサイヤ オオサイヤ ヨロコビアリヤ ヨロコビアリ ワガヲモフコノトコロヨリ ホカヘハヤラジトヲモフ」の謡に合わせて三番叟は拝殿の中央から舞いはじめます。

最初は年の初めの礼拝として三方を捧持して能面のお供えをし、次にお払い、それから田耕し・草刈と進んでいきます。次に右手を振って種まき・田植えの状態を表します。次に、うつ伏せになって前進するのが鳥追い、次は月抱えでこれは両手を開き名月を抱えて舞う格好です。やがて収穫・奉納へと進みます。最後に拍子木を打ち、笛を吹き、囃子をたて、戸を激しく乱打して御礼で終わりになります。このように農作業に関する舞を演じて祈りを込めて清めをなすのだと伝えます。

## 受け継がれる衣装と道具

三番叟の舞は少年が踊ります。三番叟に出演する少年は、顔に白粉を塗り眉毛や口元に隅取りを行います。装束は橙色の着物の上に、若松に鶴の模様入りの青色の素襦すあわを着け、同じ柄の袴に白足袋を着けます。頭部には、紺地に金・銀紙で形取った「日」「月」などを付けた引立て烏帽子を冠り、白

鉢巻で固定します。引立て烏帽子とは、陣中であって礼容を整えるために頂を引き立てた揉烏帽子もみえぼしのことで、出陣の際、兜の下に着用するものです。

三番叟は舞の他に、拍子木・囃子方・笛（横笛／白笛）があります。拍子木とは、二つ打ち合わせて鳴らす四角い柱形の木です。囃子方とは、拍子を取り、または情緒を添えるために伴奏する人のことです。横笛とは、横に構えて吹く笛の総称です。

三番叟に出場するのは、主役の少年1人・笛2人・拍子木1人、囃子方2～3人です。ちなみに今年は、主役の少年1人・笛4人・拍子木1人、囃子方2～3人だったそうです。現在の三番叟で使用している衣装・道具は、10年前に新調した物です。これからも守っていき、受け継いでもらいたいです。

## 受け継ぐために

保存会は今から約20年前にできました。保存会ができたきっかけは、その時の区長さんがこのままだと三番叟がなくなるのではないかと不安になったから保存会を立ち上げることにしたと聞いています。当時は、地区の区長さんと代表3、4人、全員で8人ぐらいました。今は、組織的に名前はあるが実働しているのは3、4人です。この状況をどうしているか悩んでいます。

でも、三番叟というのは、年に1回春祭りで神社に奉納



神事舞の三番叟を見つめる人々

するものと伝承され、とても変わった神事舞だと思います。それを保存するにあたって、会を20～30人に大きくしても機能しないと思っています。この状況を考えながら、取りあえず少数で受け継ぐ方法を考えています。

### これからの三番叟

伝統ある三番叟を未来に残していくには、今、後継者が必要です。現在の保存会には、私を含め同年代の方4人が活動しています。しかし、これからの三番叟を支えてくれる後継



熱く語る吉田さん

者となる人がまだ決まっていません。

後継者は、三番叟の舞を子どもに教えてくれる人が一番、重要です。三番叟は、複数の人で教える舞ではないと思っています。1人の人が最初から最後まで教えていくことで三番叟という舞が成り立ちます。1人の人が教えていくほうが良いとされる理由は、以前三番叟の指導を2人で教えていたことがあり、指導者同士で問題が起きました。それは、教え方の順番や舞の形や笛のタイミングなど、それぞれの考え方の違いが出てしまい、2人が教えると2通りの舞ができてしまいました。舞う少年が戸惑うようなことが起きました。そこで、これからは舞う少年1人に対して、三番叟の舞を継承していくには、後継者となる指導者の中で、1人が伝統ある舞を少年に教えていくことが大切だと考えられるようになりました。

### 願い

一番の願いは、やっぱり『三番叟を絶やしてはいけない』という思いです。でも誰かがやらないといけないうようになってくると、その誰かは保存会の中で考えていかなければいけないと思います。ほかに後を継げる人がいるとは思いますが、なかなか見つからない……。そこが難しいことなん

です。

今のままの保存会では、私が引退した時に誰も後を継ぐ人がいないと思います。保存会に入ってもらうためにも、若い人に声かけをしているのですが、皆、三番叟を教える立場という責任を重く感じて、なかなか保存会に入ろうとはしてくれません。でも三番叟を守り続けるためには、後継者が絶対に必要なのです。だから、今は、三番叟を守っていくためにも、次の世代に保存会を残していけるように頑張りたいと思っています。

[取材日：2014年8月8日・9月13日・10月4日]

## PROFILE

**吉田 外喜夫** よしだ ときお

昭和30年3月15日・59歳  
三番叟保存会 会長代理

以前は、役場に勤めていたが、退職し、現在は、三番叟保存会で会長代理を務める。毎年春祭りに行われる奉納神事舞三番叟を、主役に決まった少年に教えている。18歳の頃から地域の青年団に入り、約40年間、三番叟に携わっている。



### ● 取材を終えての感想 ●

私は、初めて「聞き書き」に参加し、いろいろなことを体験しました。名人に取材し、自分たちでまとめていくこの体験がとても難しかったです。取材やインタビューはしたことがあったから、どんなことを質問したらよいか？ 聞けば良いかはすぐに思いつきました。しかし、この取材は自分たちで冊子を作るので、意味のある質問や冊子にして読者に伝わるように書くための質問を考えるのが難しかったです。取材の時も返答された内容が解らないところ、知りたいところを見つけ、さらに質問していくことが難しかったです。私はまとめることがあまり得意ではないので、すごく時間がかかりました。読者に伝わるように、まとめて書くのは難しかったです。たくさん時間をかけながら、頑張ってまとめました。

この「聞き書き」に参加して、たくさんのことを学ぶことができました。自分も能登に住んでいるのに知らないことがあり、それをより詳しく知ることができました。この体験に参加してよかったと思いました。

今回取材し、まとめることは簡単なことじゃないということを知りました。難しいことだらけだったけど、少しは文章をまとめる力がついたと思います。この体験ができてよかったと思います。

(見砂佑香)

私はこの「聞き書き」に参加して、名人である吉田さんにお会いすることができて本当に良かったと思います。この体験で三番叟に対する人々の想いや、三番叟を今日まで残してきた保存会の成り立ち、青年団に入っていた頃から三番叟に携わってきた吉田さんの現在の想い、たくさんのことを三番叟という1つのことから、知ることができました。

三番叟について触れて感じた「想い」のすごさです。三番叟が明治から今日まで続いてきたのには、「絶対に絶やしたくない」という地域の人々の想いがあったからだと思います。未来にも残していきたいという強い想いがなければ、三番叟を残していくことはできなかったと思うし、これからにも同じことがいえます。吉田さんがおっしゃっていたように誰かがやらなければ続けることはできません。現在保存会に所属している方々はきっと自分がやらないといけないという想いから三番叟を守り続けてくれています。だからこそ、これからの未来に三番叟を残すための後継者を早く見つけてほしいです。私は三番叟がいつまでも人の手によって残ることを願っています。(川嶋唯里)



川嶋唯里/見砂佑香/演じた少年/父親/吉田さん